

第三十六章 鉄道橋

アジアからユーロへの鉄道路線。ユーロ内の鉄道網はすべてシールドされている。このシールドされた鉄路を走る限り移動の安全性は保証される。そのほかにも日本の高速鉄道網（新幹線と呼ぶ人もいるが）もそうだ。そのほかにもシールド鉄路はある。

ところがソシアに併合された後、ソシアは本国から兵士、兵器、弾薬、食糧、燃料などをクリーム半島に運ぶための補給ルートとして橋を架けた。

ウクライナー国内を流れる大河ドニエイプリル川やソシアから流れ込む河川が運ぶ土砂は並大抵ではない。ブラックシーに流れ込む土砂によってあちらこちらに幅が広く長い砂州を形成した。砂地なので基礎工事は難航するが簡単に砂州と砂州を架橋できる。

逆に海岸の水深が浅いから大型船舶は着岸できない。たとえばクリーム半島を併合してもいわゆる良港はない。浚渫しゅんせつして一から港を造らなければならない。

それでもクリーム半島はブラックシーの要衝の地である。だからソシアは強引にウクライナーからこの半島を取り上げた。しかし、半島のつけ根より北側は依然としてウクライナー領でそこから物資の搬入はできない。そこで半島から伸びた砂州と対岸のソシア領から伸びた砂州に橋を架けた。そして線路と道路を敷設した。

ソシアにとって問題なのはクリーム半島とソシア本国を結ぶクリーム大橋の鐵路はシールドされていないことだ。完璧にシールドされた鐵路を敷くには高度な技術力を要するし走行する特急列車との連携が必要となる。つまり相性がある。

一方ウクライナー国内はもちろんのことユーロ鉄道網やシルクロード本線はすべてシールドされていて安全に移動できる。

説明はこれぐらいにとどめてクリーム大橋の鉄道橋に戻す。この橋を走行する列車はソシアの軍用列車だけで民間の旅客列車は運行されない。つまりウクライナー軍からすれば遠慮なく攻撃できる橋だ。

ソシアは人道上クリーム半島の民間人を避難させるためにこの橋は重要だと主張する。散々ウクライナー共和国の住宅、ショッピングセンター、学校、病院そのほか社会インフラを攻撃破壊しておきながらクリーム鉄橋を攻撃すればテロだと主張する。しかし、道路橋を使えば済む話で鉄橋を使う必然性はない。自動車で駅まで行って鉄道に乗り換えるよりは道路橋でそのままソシアに行けばいい。

*

とにかくクリーム半島は重要拠点に違いない。ソシアの領土あるいは支配地域はいわゆる飛び地が多い。東は北方領土から西はカンニングランドまで本土と離れている領土が数多い。飛び地が多いと言うことは領土を守るコストが高いと言うことになる。しかも多民族国家になる。

離れていて経済的に自立できない民族も多い。人種や宗教が異なれば言語や価値観が異なる。ましてや新たに領土を拡張するために併合という手段を執ると国際的にも批判される。紛争が起こればどうしても戦線が長くなる。そうになると兵站を確保するのに苦勞する。悪いことづくめにプチレンコンは領土拡張を好む。

道路と違って鉄道は災害にも強い。頑丈に作られている。駅は都市や村の拠点にもなる。移動中に人間同士の会話も生まれる。だから特にユーロ圏内を中心に鉄道をシールド化して鉄道網を整備した。やがてその方法は南北アメリカやアジアにも広がり、アフリカ大陸もその方宇高に向かう。もちろんソシア国内の主要鉄道網もシールド化されている。

前提条件に電化が必要なので発展途上国にはシールド化鉄道網の整備のハードルが少し高い。シールド化には電力が不可欠だからだ。だから道路のシールド化は難しい。すべての自動車が電気自動車になれば可能かも知れないが、個別的で複雑移動する自動車が走行する道路網をシールド化するのは無理だとも言われている。それは歩道をシールド化できないことを考えれば当然のことだ。

*

「ソシアはなぜクリーム鉄道橋をシールド化しなかったのだろう」

宇宙戦艦の艦橋で加藤の疑問にイリも榊も考え込むが、速くもイリがさじを投げる。

「ソシアの技術が後れを取っていると言ってもシールド化するぐらいのことはできるのでは」

とは言うもののイリはシールド方式についてほとんど知らない。あえて言えばバリアと似ているという程度の知識しか持ち合わせていない。代わりに榊が答える。

「経済制裁で半導体などの部品が入手できないのかもしれない」

「そうかなあ。あえてシールド化しなかったんじゃないかな」

疑問を投げかけた割には加藤が意味ありげな言葉を口にする。

「どうということなの」

同じことをノロが言ったら徹底的に突っ込むがイリにとっては少し勝手が違う。

「シールド化する資金がない」

再び榊が代弁するとイリが大きく頷く。

「クリーム半島はウクライナ軍の反転攻勢で苦境に立たされている」

「だから兵士や物資を補給してるのでしょ。このクリーム大橋を使って」

「そのとおりです。大橋は丸見えです。大量の戦車や大砲を運ぶには危険すぎる」

「そんなことはないわ。ソシアはソシアユーロ鉄道網を使って大量の武器をウクライナに投入したわ」

イリも榊も黙って次の言葉を待つ。

「それはシールド化された鉄道網だったから」

「あつ、そうか。巨大な橋だからごまかされたけれど、確かに平面じゃなく一本の線にすぎな

い。強力な機関車を持っても運ぶ量はしれているわ」

加藤の表情が緩む。

「誤解しないでください。今までとこれからの説明も単なる私の想像です」

イリが肩の力を抜いてなで肩にする。

「一方通行では効率が悪い。というよりある程度の大金を掛けて建設したクリーム大橋をクリーム半島にいるロシア人や親ロシア人の脱出にだけ使うのであればプレンコン大統領は批判される」

イリが首を傾げる。

「なぜクリーム半島から撤退するために大橋を建設したのか。それはクリーム半島のブラックシー艦隊はロシア海軍のエリートから構成されているロシア海軍の将校や下士官を無事に本国に引き戻させるためです。彼らはプレンコン大統領の有力な支持者やその子息や親族です。ブラックシー艦隊旗艦名はロシアの首都モシモです」

「身内を助けるためなのね」

「仮にクリーム半島が奪回されても身内を脱出させれば文句を言う有力者はいません。その後この橋を使ってウクライナー軍がロシア本土を攻撃しようとするればシールドされていませんから簡単に破壊できます。撤退が完了すればこの橋は要りません」

あまりにも理屈にかなった加藤の説明にイリはもちろん榊も感心する。リスクもあるがあえ

てシールド化しなかった理由を理解したイリが重大な決心をする。
「イリ・ライナーをクリーム半島の反対側のソシアに向かわせなさい」
これには加藤も榊も驚く。